

高品質周年生産を可能にするニラの省力、簡易育苗法

手嶋康人・松垣喜詞 (大分県農業技術センター)

Yasuto TESHIMA and Yoshinori MATSUGAKI:

Simple and Labor-saving Raising Seedling of Chinese Leek for High Quality and Year-round Production

大分県のニラ産地では、冬春型を主体に夏秋型との2作型を併用して栽培しているが、育苗に労力を要するため立て越し栽培が多く、品質および収量の低下が問題となっている。

そこで、機械移植で省力化が図られ、1年株利用による高品質周年生産が可能となる簡易育苗法について検討したので報告する。

1. 材料および方法

1999年6月21日に品種‘スーパーグリーンベルト’のコート種子を用い、220穴セルトレイ1穴当たり3粒播種した。木枠を作り、ビニルフィルムの上に底面給水マット(ラブマットU)と防根透水シート(スピニアウト)を重ね、その上にトレイを置いた湛水育苗区(写真1)、コンクリートブロックの上に金網をおき、その上にトレイを並べた棚育苗区(写真2)を設け、慣行の地床育苗区と比較した。育苗はビニルハウス内で60日間行った。湛水育苗区は1日1回トレイが1cm浸る程度に灌水し、棚育苗区および地床育苗区は1日2回灌水した。育苗時の施肥は、培土にあらかじめ緩効性肥料(マイクロロングトータル70日タイプ)を窒素成分で0.95g/L混和しておく方法と、液肥(OKF-1 500倍液)を3日に1回施用する2方法を検討した。

定植は、1999年8月19日に手植えで行い、栽植様式は畦幅160cm、株間27cm、条間25cmの4条植えて1,000株/aとした。1999年11月13日にビニル被覆し、2000年1月13日に刈り捨てた。

2. 結果および考察

湛水育苗区および棚育苗区の苗は地床苗に比べ、葉数、草丈、葉鞘径、地上部重は小さかったが、鉢内の根重は差がなかった。施肥法では、緩効性肥料区が液肥区に比べ生育が優れた(第1表)。

地床苗は根が土中に出ているため断根作業が必要であったが、湛水育苗、棚育苗ともにトレイの下に根が出なかったために、苗は手でトレイから容易に引き抜きができ、また、定植時に根鉢の固化を行う必要がなかった。

2000年2月23日から収穫を開始し、6月6日まで5回収穫した。葉幅は、4回目収穫まで10mm以上であったが、5回目は8mmを下回った(第2表)。調製収量は地床育苗区が724kg/aであったのに対し湛水育苗区および棚育苗区は723kg/a~770kg/aで、地床育苗と同等かそれ以上であった(第1図)。

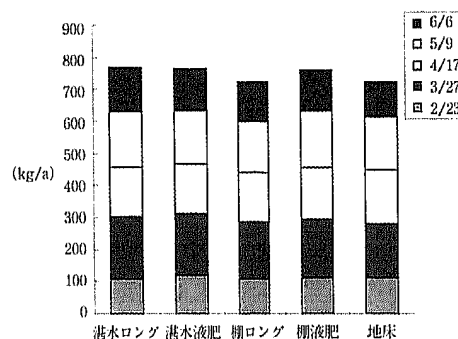
以上のことから、湛水育苗および棚育苗により根鉢の固化を必要としない苗生産が可能であり、地床苗と同等の収量を得られることが明らかになった。今後は、一層の収量増に向けて植付け本数を増やしての検討が必要である。

第1表 定植時の苗質

区	葉数 (枚)	草丈 (cm)	葉鞘径 (mm)	地上部重 (g)	根重 (g)
湛水・緩効性肥料	3.6	26.0	2.2	49.7	31.0
湛水・液肥	3.6	19.2	1.9	30.3	21.3
棚・緩効性肥料	3.6	20.6	1.8	31.7	24.7
棚・液肥	3.2	14.5	1.5	14.0	14.3
地床育苗	4.9	34.8	2.8	122.0	21.0

第2表 葉幅 (mm)

区	2/23	3/27	4/17	5/9	6/6
湛水・緩効性肥料	11.5	10.7	11.5	10.1	7.4
湛水・液肥	11.4	10.8	11.6	10.1	7.6
棚・緩効性肥料	11.0	10.7	11.4	10.1	7.5
棚・液肥	11.3	10.6	11.3	10.0	7.3
地床育苗	11.4	11.1	12.0	10.6	7.5



第1図 調製収量

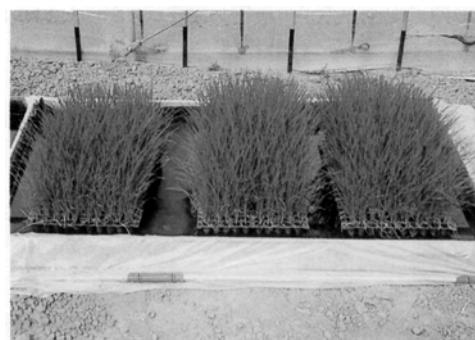


写真1 湛水育苗



写真2 棚育苗